

研究所は心のよりどころ

元編集委員 草刈 英郎

「さいたまの教育と文化」の創刊100号、おめでとうございます。この歩みに微力であっても貢献できたことを誇りに思っています。

さいたま教育文化研究所（以下研究所）の発足当初から私は事務局員として所報や機関誌「明日を創る」の刊行に携わってきました。この所報と機関誌が9号から「さいたまの教育と文化」に発展しました。また研究所の前身の埼教組教育研究所の2年間と埼玉高校教育研究会議での教育相談活動から、現在も所属している「入試・中等教育研究委員会」まで、研究所は今でも私の心のよりどころなっています。

研究所発足時の川合章所長の深い洞察力、斎藤晴雄事務局長の明るい人柄、野々垣務編集長の幅広い人脈、誠実な飯田啓子さんの事務運営、など私が研究所へ通う大きな励みになり、いそいそと足を向けたも

のでした。

「さいたまの教育と文化」の骨格は初代編集長であった野々垣さんを中心に作成されたものが現在まで継承されています。その野々垣さんから引き継いで2000年6月の16号から2004年の32号まで編集長を受け、その後は岩崎敬道さんにバトンタッチしました。この間に編集委員は入れ替わりしましたが毎号委員会での皆さんの論議を受け、力を借り知恵を集めて刊行することができました。

研究所の機関誌としての雑誌ですから号ごとに特集を組むことがあっても骨格を変えるわけにはいきません。そのような中でも重視したのが現場の教育実践と研究委員会の活動報告でした。

編集委員会では現場から報告される教育実践はもとより、県内で活動している多面の方々を取り上げるよう提起されました

が、どなたからも原稿の執筆や取材を断られることなく快く引き受けていただいたことが記憶に残っています。研究所が果たしている役割が身をもって感じられたものです。それとともに取材を通じて多くの方々と知り合うことができたのはほんとうにありがたいことでした。

当時は年4回発行の季刊でした。完成するとすぐ次の号の準備、という目まぐるしい思いをしたものです。これが月刊誌だったらどうするんだろう、なんて思いがよぎったこともありましたが、その後判型を変えるなど変化しているところもあります。が、「さいたまの教育と文化」がいつそう充実した内容で刊行が続けられることを確信しております。

創刊号の頃のこと

青年期教育・社会教育の立場から

大東文化大学名誉教授 太田 政男

『さいたまの教育と文化』の100号、おめでとうございます。

研究所発足以来、学校をとりまく状況が困難さの度合いを増してきた時代に発行を続けてこられたことに心からの敬意と感謝の気持ちでいっぱいです。

すでに長く研究所の活動や雑誌の編集から遠ざかり一読者にすぎないほくですので、研究所の発足のころの、あるいは前史の時期の思い出を書かせていただきます。

青年期教育、とくに高校教育研究をしていた頃は、1980年代から埼玉県の教育研究会や埼玉高教の教文活動、そして埼玉県高等学校教育研究会に参加させていただいていました。研究会議の機関紙『明日を創る』には、当時の事務局長だった野々垣務さんの差配によるものだと思いますが、何度も書かせてもらいました。それらの多くは埼玉県の現場の教育研究のなかで学ばせてもらったものですが、社会や労働と結

ぶ「共通課程」や「国民的な教養」の批判的な創造から教育課程をつくりかえるというテーマで、多くの研究の骨格をつくるうえで重要な土台になりました。

その後じきに埼玉教組中心の教育研究所と高校教育研究会が合同することになり、さいたま教育文化研究所が発足しました。川合章さんが所長で、ほくは副所長、正副の事務局長には斎藤晴雄さんと野々垣さんがなりました。

青年期教育研究で言えば、全国進路指導研究会の中心だった草刈さんなどの中学校教師と高校生活指導研究の野々垣さんたちがいっしょに研究所活動をする事になったのですから大きな意味があったと思います。そういうこともあって、教科別研究だけではなく、入試や平和問題など課題別の研究を重視する試みなどもしました。

研究所の発足のときにほくや野々垣さんがこだわったのは、「文化」ということでし

た。教育研究を、学校教育だけでなく、広く社会に開かれたものにしていきたいという思いでした。実際に、深谷シネマをつくって地域づくりをしている竹石研二さん、生協を中心に協同運動をすすめている菊池陽子さん、大宮の公民館職員だった佐野さんなども参加していました。

ほくはその後、『季刊人間と教育』の編集など民主教育研究所の仕事に専念せざるを得なくなり、申し訳ないのですが埼玉の研究所からは離れました。

今手元にある『さいたまの教育と文化』の最近の20号ほどを見ると、教育実践の交流や直面する教育課題についての研究論文も充実していますが、ひきこもりの若者の居場所づくり、卒業後の障害者、地域の外国人問題など地域社会への視野も広く、9条俳句など社会教育や文化問題への目配りも効いておりがたくうれしく思います。今後も奮闘を期待しています。

教職員の元気の素

民主教育研究所事務局長 鈴木敏則

感性豊かで感動を周囲の友人や教師に伝える生徒がいました。その彼女の夢は保育園の先生です。子どもが大好きな彼女は、大学で保育について学び、県内の保育園の先生になりました。その彼女から突然電話がありました。保育現場の忙しさから、体を壊してしまい、担任する園児に褒めることより注意や叱責ばかりで、「もうやっていけない」、「子どもが好きでなかったのかもしれない」と電話の向こうで泣いています。現場の忙しさは半端なく忙しく、忙しいゆえに子ども・保護者や同僚とのじっくりと対話できずにいると孤立感をも感じています。

そんな閉塞感から教職員の専門性の喜びを示してくれるのが「さいたまの教育と文化」誌です。私が学んだ中の2つ紹介します。99号「幸福感を感じる子ども期を」の筆者白鳥勲さんは「子どもが自らの潜在能力を育み、仲間たちと支えあい、平和と民主

主義を大切にする『人格』を形成する」ための実践のポイント、①大人からの温かいまなざし、②授業・学習をなにより大切に
する、③仲間の中で支え合う集団づくり、
④モデルとなる大人の存在の4つ示しています。

96号「コロナ下の学校行事を通して見えてきたもの」の筆者川島啓一さんの実践報告は感動的でマネして欲しいものです。文化祭の話し合いの中、ある先生が発した「今できることで考えれば」という発言から、クラス全員が「映画部門」「短編動画部門」「黒板チョークアート部門」「川柳部門」のどこかの部門に所属し作品づくりにかかわるようにしています。生徒たちに、映画は地元の芸能プロダクション、川柳作家、黒板アーティストのプロの方を学校にお呼びして、学びます。その結果は、校内では生徒間の「友達とのコミュニケーションの場」となり、校外では2年生のあるクラスの黒

板アート「朝霞駅」は黒板アート甲子園で審査員特別賞受賞し、駅長が作品を見に来校し、感動して駅長さんが朝霞駅構内に大型ポスター「黒板アート甲子園で受賞」を貼ってくれ、朝霞駅と高校の交流が。映画では2作品が町おこし一環の企画「市民映画祭」で審査員特別賞受賞と地域との交流が生まれています。なによりも生徒たちが「全部違って面白かった」と生徒たちに新鮮な気づきがあり、取り組みの中で生徒と教職員の信頼を深めています。生徒たちは全校生徒アンケートをもとに、トイレの改修、自動販売機の中身の選定など要望書を学校に提出し話し合いの結果、要求が実現しています。学校生活を見直し、先生方と話し合う生徒たちが主人公になっています。

「さいたまの教育と文化」誌のどの号も校種を超えた実践と理論の学びに満ち溢れ、教職員の元気の素です。

子どもたちの未来のために

全国労働組合総連合議長 小畑雅子

「さいたまの教育と文化」100号発刊
おめでとうございます。これまで、「さい
たまの教育と文化」発行に関わってこられ
たすべての皆さんに、感謝申し上げます。

子どもたちと悪戦苦闘しながら、つたない
実践を重ねてきた私にとっては、「さい
たまの教育と文化」は、時に道しるべとな
り、時に癒しの場となり、そばにいてそっ
と背中を押してくれる友のような存在でし
た。初任者の頃、職員会議で、行事の企画
について議論が百出してなかなか結論が出
なかった時に、「多数決をとってしまえば
いいのに」とつぶやいた私に、当時の分会
長が、「民主主義は時間がかかるものなん
だよ」と静かに話してくれました。この言
葉が、その後の実践でも、労働組合の活動
でも、私の芯の部分にすわっていたと思っ
ます。それを理論的に支えてくれたのも、
「さいたまの教育と文化」でした。

その民主主義を脅かす動きが続いていま

す。年末には、敵基地攻撃能力の保有を含
む大軍拡路線となる「安保関連3文書」が
閣議決定されました。歴代政権が少なくと
も堅持してきた「専守防衛」さえ投げ捨て、
憲法を壊す安全保障政策の大転換を、国会の
審議も経ずに、閣議決定のみで強行しよう
とする現政権の姿勢に怒りていっぱいです。

私は、閣議決定された当日に、「#増税
と大軍拡に反対します」「#勝手に決める
な」をタグでつけてつぶやくTwitter
エデモを呼びかけ、2日間で15万ツイート
となりました。たくさんの方が寄せられま
したが、一つだけ紹介します

「今日も思ったけど、私は我が子を含めて、
子どもや若者がおなかいっぱいごはんだべ
て、うれしそうにしている顔を見るのが大
好きです。この子どもたちが安心して生活で
けるのに税金をつかってほしい。また、この
子どもたちを戦場におくこと・戦争に巻き込
むことは嫌です。#増税と大軍拡に反対し

ます」

私も同じ思いです。岸田自公政権は、「子
ども関連予算」を2倍にするという公約は
果たさず、軍事費だけは、いとも簡単に2
倍化し、ローンで買った高額兵器の後年度
負担まで、国民に押し付けようとしていま
す。全教は、「防衛予算より、教育予算増を」
と呼びかけ、福祉保育労は、「子どもたち
にもう一人保育士を」と呼びかけています。
子どもたちのためにこそ、政治の責任を果
たせの声を大きく広げていきたいと思いま
す。

2023年の年明け、両親と私たち夫婦、
そして妹一家の総勢15人で穏やかに迎える
ことができました。両親にとってはひ孫と
なる4人を含めて、4世代が集まりました。
この子どもたちの未来に幸多かれと願わずにい
られません。そのためにも、「さいたまの
教育と文化」のますますのご発展を祈念し
ています。